

# 能動的心理療法の観点から見た母親面接の意義

名 島 潤 慈

On the Significance of the Mother Interview from the Viewpoint of Active Psychotherapy

Junji NAJIMA

(Received September 26, 2003)

## ABSTRACT

During the past few decades, there has been much discussion over the significance and the aim of the interviews with mothers who have problematic children, adolescents or youth. In terms of the mother interview, the author holds a view that (a) therapists must work within or from the mothers' internal frame of reference and (b) therapists should rely on mothers' constructive selves. The paper focuses on helping mothers develop their activeness through interviews with the therapist. Mothers usually go through considerable struggles and setbacks on their trajectory toward effective coping during the course of the therapy. Hope waxes and wanes. Psychotherapists must assist mothers tenaciously to get over their difficulties.

Key Words: Active Psychotherapy, activeness, mother interview

## I はじめに

何らかの心的問題を抱えている子ども本人（ないし青年本人）が直接セラピストの許にやってくることができればそれが一番よいのであるが、実際には面接室までやって来ることができない（ないし来ることを拒否する）子どもが少なくない。神経症的登校拒否が代表的であるが、その他、家庭内暴力・非行・対人恐怖・引きこもりなど。（対人恐怖や引きこもりには、30代の大人もいる。）

子ども本人が来られない場合には、セラピストは母親のみを相手とした単独母親面接を継続することになる。この場合、母親面接はいわば間接的援助となるため、むずかしい点が多々ある（名島, 1983を参照）。しかし、能動的心理療法の観点からすれば、わが子の不適応ないし問題行動という家族的危機にさいして母親自身の能動性を活性化すれば、母親面接もきわめて有効な援助手段となろう。

母親Aは中学2年生の長男がクラス内の「いじめ」をきっかけとして登校渋りを始めたとき、「どうしても嫌なら学校を休んでもいいが、休んだときには家事をすること」という条件を出して長男とねばり強く交渉した。その結果長男は、家での掃除・洗濯・買い物がもたらすきつさよりも学校で味わうきつさのほうがまだましだということで登校渋りをやめた。（この場合2人だけの母子家庭だったので、長男の手助けをしてくれる兄弟はいなかった。それだけ長男の

きつさは増したわけである。)

母親Bは、不登校の小学校6年生の長男が自分で自分の首を絞めたり、首吊り用の紐を鴨居からぶら下げたりするようになったとき、首吊りによる死というものがいかにうす汚い死であるかということイメージ的にこと細かく説明した。その結果、長男の自殺願望はなくなってしまった。

母親Cは、朝起きができずにいつも学校に遅刻していた中学校1年生の長女に対して、一家の愛犬の朝の散歩という役割をあてがってみた。その結果長女の夜型は治り、学校に遅刻することがなくなった。もともとその役割は祖父の役割であったが、祖父がたまたま病気になったこと、長女自身もその犬を大変好いていたということとをCがうまく利用したのである。

母親Dは、日常の身の回りの世話にひどく手のかかる高校1年生の長男と不登校中の中学1年生の長女の世話にほとんど疲れ、半ば意図的にすべてを投げ出してDの実家に一晚泊してみた。そして、翌日遅く帰宅して聞いてみると、長男は自分で目覚まし時計をかけて朝の7時に起き、しかも自分で弁当を作って登校、料理の好きな長女は食事の支度、夫は洗い物やお風呂の支度などをしたという。

これらAからDの母親の場合、セラピストが予想もしなかったような母親自身の工夫によって危機への対処がなされている。筆者は既に30年近くも母親面接を行っているが、困難な状況をなんとかして切り抜けていこうとする母親の知恵に驚かされることが少なくなかった。

本稿では、一般にむずかしいとされている母親面接の進め方について、能動的心理療法の観点から吟味してみたい。

## II 母親面接におけるセラピストの一般的留意点

筆者にとっての母親面接の目的とは、危機に対する工夫の創出を通して母親の建設的自己を活性化させることである。表1は、このような母親面接におけるセラピスト側の一般的な留意点をまとめたものである。これらのうち、⑤の「工夫の相互性」ということについて少し補足しておきたい。危機に対する母親なりの工夫を母親に要請するということは、セラピスト自身にとっても工夫を要請されることになる。ただし、セラピストにとっての工夫というのは、「母親なりの工夫が出てくるような環境を作り出すための工夫」という意味であって、セラピストから何か具体的なアドバイスを母親に投与するための工夫という意味ではない。

表1 母親面接におけるセラピストの一般的留意点

- 
- ①母親の「親としての自尊心」を傷つけないように注意する。
  - ②他ならない「この母親」と出会ったという縁を大事にする。
  - ③母親のなかの建設的自己に絶えず呼びかけるようにする。
  - ④危機というものを、母親の創意工夫を要請する好機としてとらえる。
  - ⑤工夫の相互性に留意する。
- 

能動的心理療法におけるセラピストの位置づけは、基本的には「活性化させる人 (activator)」であり、「開発者 (developer)」である。そして、セラピストと母親との関係は、相互的活性化 (mutual activation) の形となる。つまり、セラピストと母親は、相互にそれぞれの建設的自己

を活性化しあうことになる。特に、子どもの問題が長期にわたっており、しかも、子どもも母親もそれぞれに薬物療法を受けているといった場合には、セラピストは母親の建設的自己をどのようにしたら活性化できるのか、さんざん知恵を絞らされることになる。

### Ⅲ 最初の包括的オリエンテーション

母親が筆者の許にやってきたとき、子どもの現在の状態や生活形態、家族構成などを聞いた後、筆者は概ね以下のようなオリエンテーションを行っている。

〈お母さんとしてはこれ以上打つ手がないということでしたが、本当にそうなのでしょう。どのような危機であれ、まったく何の対処もできないということは、人生においてそれほどあることはありませんが〉〈家庭内でお母さんなりに何かできることがないものか、何か工夫できないものか、これから一緒に考えてみませんか〉〈ずっと家のなかにこもっているお子さんは現在25歳とのことでしたね。だとすれば、お母さんはこの25年間、ずっと一緒にお子さんと過ごしてこられたわけです。お母さんはいわば、25年間分のデータをお持ちになっておられる。ぜひそのデータを生かしてみられませんか〉

これらの包括的オリエンテーションは、母親に対する工夫の勧めである。この工夫の勧めは、母親の持つ建設的な育成力への呼びかけでもある。また、筆者の行う母親面接が何を目指しているのかを母親に伝達する試みでもある。母親側の反応としては、「とまどう人」「困惑する人」「深く頷く人」「ほっとした顔になる人」など、さまざまである。特に他の相談機関において子どもの育て方や養育態度を非難された経験のある母親ほど、筆者の包括的オリエンテーションに接すると安心するようである。

セラピストが母親に対して包括的オリエンテーションを行う場合、最も重要なのは、セラピスト自身が母親のなかに潜在している建設的自己を信頼できるかどうかということである。口先だけでいくら包括的オリエンテーションを行っても効果はないであろう。

初回面接にやってきた母親が抑うつ的な場合とか、セラピストに対して過度の期待を有してやってきた場合など、セラピストが最初から工夫の勧めを教条的に行うと、母親の失望感や絶望感が一挙に増すことがあるので注意する。

ちなみに、この包括的オリエンテーションは最初のみでなくて、継続的な母親面接が行き詰まったときにも用いる。また、いったん母親が動き始めたとしてもなかなかスムーズにいかないことが少なくないが、そのようなときにも適宜、包括的オリエンテーションを行う。そして、包括的オリエンテーションを行いながらじっくりと待っていると、再び母親が動き始めることが少なくない。

### Ⅳ 中立的態度による観察

上記のような包括的オリエンテーションを行った後、筆者は母親に対して、子どもを観察してみるように勧める。観察するさいには、できるだけ「中立的な態度」で子どもの言動を見てもらおうようにする。そして、子どもの言動に何か変化が生じなかったかどうかを次の回の面接で報告してもらおう。ちなみに、面接のペースは週に1回が多い。しかし、母親がひどく遠方に

住んでいるときとか母親の仕事上の理由でなかなか時間が取れないようなときには、月に1回という場合もある。

面接にやってくるたびに、「何の変化もありませんでした」などと言う母親がいる。このような場合、セラピストとしては本当にそうなのかどうかを慎重に吟味してみることが大切となる。例えば、「わが子は学校に行くべきである」ということに強くとらわれている母親の場合、子どもが学校に行かないかぎり（あるいは学校に行く素振りを見せないかぎり）、まったく何の変化もないということになる。また、「学校に今すぐ行けないのは仕方ないとしても、勉強さえしてくれればいい」ということに強くとらわれている母親の場合、子どもが家で勉強を始めないかぎり、子どもの言動にはまったく何の変化もないということになってしまう。

中立的な態度による観察というのは、わが子に対してつかず離れずの距離で観察することといってもよい。筆者自身は母親に対して、〈あたかもよそのお子さんを見ているときのように観察してみてください〉といった言い方をすることが多い。

家庭内暴力の場合には、子どもが暴力という手段で母親との距離を縮めようとするので、母親は子どもと適切な距離を保つことがむずかしくなる。しかしこの場合でも、観察は継続してもらおう。子どもが母親に対してどのようなときにどのような手段で、どの程度の力（強さ）で暴力をふるうのか、暴力をふるったあとはどんな状態になるのかなど、観察すべき事柄は数多くある。

## V 変化への注目

観察することの主たる目的は、子どもの変化である。変化には、①同一のカテゴリーの行動で、頻度や様態がこれまでとは異なることと、②それまでに見られなかった新しい動きが出てくることの2つがある。①では、表情が暗いものから明るいものになる、家族に対する暴力の頻度が減る、それまでは人を叩いていたが今度は物を壊しはじめたなど。②では、急に熱帯魚を飼いはじめる、家の庭の隅に植物を植えてその世話をはじめるなど。

変化が生じた場合、セラピストとしては、変化の前後を母親と一緒に詳細に吟味してみる。するとそこには、母親が意図的に、あるいは無意識のうちに行った働きかけ（工夫）が見いだされることが少なくない。

もっとも、観察と変化とはけっして無関係ではない。例えば母親Eは、セラピストによる観察の勧めに従って次女（高校1年生）を、あたかも他人を見るように観察してみることにした。すると次女の態度は穏やかなものへと変化し、Eを叩いたり蹴ったりする頻度が激減した。勉強に対して無気力で化粧ばかりに精力を注いでいた次女に対して、それまでのEは口うるさく注意・叱責し、そのたびに次女は暴力的になっていたのである。

ここで注釈しておく、この場合Eは次回の面接までに観察した事柄を、次回の面接においてセラピストに報告しなければならなかった。つまり、「観察」のほうにEのエネルギーが注がれた結果、そのぶんだけ「注意」「叱責」のほうがおろそかになってしまったわけである。観察は中立的な立場にたった観察であり、それ自体、子どもに対するそれまでとは異なった関わり方なのである。

## VI 工夫とは何か

工夫とは危機を脱するためのよりよい方法を考え出し、それを実行してみることである。たとえ最初の工夫が偶発的なものであったとしても、いったん母親なりの工夫が何らかの効果を生むと、母親はさらに新しい工夫を重ねていく。これは言うまでもなく、母親の能動性が回復したためである。

子どもの状態が変化し、その主たる要因として母親なりの工夫があった場合、セラピストとしてはその工夫が母親自身の発想に基づくものであったのか、それとも母親以外の人物、例えば母親の夫や友人などに強く勧められたものなのかどうかを吟味しておく必要がある。他者から強く勧められた工夫の場合にはどこか無理（不自然な力み）があり、かえって子どもの反発や嫌悪を招くことが多い。

## VII 工夫するということがよく分からない母親について

最近の浅原（2003）の研究にもあるように、母親は母親なりに工夫していくものである。ただし母親のなかには、いくら面接を重ねても、「工夫するということがよく分からない」と言う母親もいる。このような場合、母親が何気なく行った事柄をセラピストが適切にとらえて、それが工夫であるという指摘を行ってあげるとよい。（このような指摘はもちろん、母親面接だけでなく、クライアントとの面接においても有益である。名島、2001を参照。）

母親Fは、中学1年生の長男の不登校が長引いたとき、たまたま学校のPTA活動で知り合った他の母親（その母親の子どももかつて不登校であった）からある相談機関についての情報を仕入れた。そして、その相談機関を足がかりにして、地域内にある不登校に関するさまざまな相談機関・教育機関のリストを作成し、電話や直接訪問によって各機関の活動内容を確認していった。もちろん、そのことによって長男の不登校が回復したわけではなかったし、長男がそれらの機関にすぐに足を運ぶということもなかった。しかし、地域内にはさまざまな相談機関・教育機関が実際に存在しており、しかも、いつでも利用可能であるということがFに大きな安心感とゆとりをもたらしたのである。これはいわば、「社会資源の潜在的活用」という一つの工夫である。このような場合セラピストは、〈お母さんは今回、不登校についての相談・教育機関の情報をたくさん得られましたが、これも一つの工夫だと言えますね〉などと指摘してあげるとよい。

母親が自分なりに工夫して子どもに働きかけ、その結果、子どもに何か良好な変化が見られたとき、母親の態度は変わるものである。

工夫ということが母親によく分からない場合、過去に遡ってみるのもよい。例えば慢性的登校拒否の場合、子どもがある時点から突然、一貫して慢性的な登校拒否状態になるということはずがない。例えば小学校4年生のときに少し登校しぶりがあり、小学校5年生のときに1か月休み、小学校6年生のときに3か月休み、中学校1年生のときから継続的に休みはじめる、といった具合である。この場合には、小学校5年生と6年生のときにそれぞれ短期間の登校拒否があるが、それぞれ子どもは回復している。セラピストは、この小学校5年生と6年生のときの母親の対応を母親とともに吟味してみる。すると、そこには、当時の母親なりの対応がなされていたことが少なくない。

## VIII ハプニングに近い工夫について

「工夫」のなかには一種のハプニングに近いものもある。つまり、あれこれ考えてやってもうまくいかず、追いつめられた挙げ句の果てに母親が子どもに対して無我夢中で取った行動が効果的となることがある。例えば、母親Gの長男（小学校6年生）は4年前の両親の離婚のことでGを責めるようになった。具体的には、「母親は悪いことをした。許せない。殺す。さみしかった自分を分かってくれなかったから」などと述べて、包丁でGを脅したり、ハサミをGに投げつけたりした。そして、とうとうその年の年末にはGにつかみかかってGをめったうちにした。それまでのGは長男の暴力をあえて甘受していたが、そのときのGはさすがに、このままでは本当に殺されるかもしれないと思い、無我夢中で長男に立ち向かった。結局、双方ともにとことんなぐりあったわけであるが、これを最後として長男の家庭内暴力はふつりと絶えた。母親の捨て身の反撃が功を奏したわけである。

セラピストとしては、このようなハプニングが生じるかもしれないということを念頭に置きつつ母親とつき合っていくことが大切となる。

## IX 転換について

転換とは、注意・関心・概念の志向性を既存のものから別のものへと振り向けることを意味している。転換には、「路上で人を叩く代わりにリングで叩く」（場の転換）、「左手首を切る代わりに献血に行く」（目的の転換）、「母親の頭にラジオをぶつける代わりにラジオを壊す」（対象の転換）、「癩癩を爆発させる代わりに癩癩玉（宝の玉）として大切に心のなかにしまっておく」（概念の転換）など、さまざまなものがある（名島、2002を参照）。その他、大災害とか宗教的経験による「価値の転換」「人生観の転換」なども含まれよう。

転換は広義の工夫の一種であるが、クライアント本人との面接や母親面接においてそれほど頻繁に生ずるものではない。

セラピストが転換ということを念頭に置いた場合、ともすれば転換にまつわる直接的なアドバイスの形を取りやすくなるので注意する。セラピストとしてはあくまでも工夫の要請といった線に沿った働きかけをすることが大切である。例えば、＜これまでのお話では、お母さんは、学校や地域で問題行動ばかり起こしている息子さんをどうしても好きになれないということでした。好きになれないどころか、いつそ死んでくれたらいいともおっしゃいました。しかし、子どもの問題行動は一般に、親との関係を変化させる試みでもあります。息子さんがお母さんとの関係を変化させようとしているのなら、お母さんも息子さんとの関係を変化させようとしたらいいかもしれません。お母さんがこれまでとは違った働きかけをすることで、息子さんのほうも変わるかもしれません。何かお母さんなりに考えてみて息子さんに働きかけてみたらいいかがでしょうか＞といった具合である。

転換についての範例をセラピストから母親に対提示してみるのもよい。＜お子さんは友だちにからかわれるとかっとして、つい相手の子を叩いてしまうということでしたね。ところで、道路で人を叩けば留置場ですが、リングで叩けばチャンピオンです。このような話を聞いてどう思われますか＞といった具合である。この場合、セラピストとしては指示的にならないように注意する。セラピストは子どもの問題行動と転換についての範例をそっと対提示するだけである。工夫する主体はあくまでも母親にある。セラピストは、母親が考えるきっかけを提供す

るだけなのである。

## X 母親のタイプと工夫の要請

一口に母親といっても、いろいろなタイプの母親がいる。表2は面接場面における母親のタイプであり、表3は、それぞれの母親のタイプがセラピストからの工夫の要請に対してどのように反応するかについてのものである。筆者のこれまでの臨床経験から記述してある。以下、各タイプと反応との関連性について述べたい。

表2 面接場面における母親のタイプ\*

母親のタイプ	セラピストに対する態度	セラピストが受ける感情
I 無力-依存的	セラピストにべったりともたれかかる。	初めはいい気持ちで、あとで閉口する。
II 自責-誘惑的	それとなくセラピストの気をひく。	初めは同情させられ、あとでうんざりする。
III 他責-攻撃的	それとなくセラピストをおどす。	つい非難したくなる。
IV 不関-回避的	よそよそしく、なかへ入りこませない。	不快感や腹立ちを感じる。
V 中立-操作的	ひそかに巧妙にセラピストを操作する。	おおむねいい気持ち。
VI 率直-協力的	悪びれない素直な態度。協力的。	清々しい感じを受ける。

\* 面接経過によって、あるタイプから別のタイプへと変化する。

表3 母親のタイプと工夫の要請

母親のタイプ	工夫の要請に対する母親の反応
I 無力-依存的	「私なんかには何も思いつけない」「私には何もできない」などと主張して、ひたすらセラピストに対処法をねだる。
II 自責-誘惑的	「私が悪いんです」「私は罪深い母親です」などと主張し、セラピストからなんとかして対処法を引き出そうとする。
III 他責-攻撃的	教師や夫を責めたてるばかりで、なかなか対処法の話には行きつかない。
IV 不関-回避的	母親としての義務としてここにやってきているだけで、自分がどう対処したらよいかといったことにはほとんど関心を示さない。
V 中立-操作的	言葉や行動で巧妙にセラピストを持ち上げてセラピストをいい気分にさせるので、セラピストは知らないうちにさまざまな対処法を語らされてしまう。
VI 率直-協力的	母親なりの対処法の案出に対して、率直かつ協力的な姿勢で取り組む。

## 1. 無力-依存的タイプ

1 番目の「無力-依存的タイプ」はセラピストにべったりともたれかかる人である。セラピストに対してあれこれと対処法をねだる。子どもの状態がちょっとでも悪い方向に変化すると、あわてふためいて夜中にセラピストの自宅に電話してきたりする。

無力-依存的タイプの母親では、抑うつ状態がひどいときもあるので注意する。場合によれば、医師に紹介することが必要となる。そのあとは医師の判断にもよるが、医師のところで抗うつ薬や精神安定剤を処方してもらいながらセラピストの許で継続的母親面接を行うことになる。

医師を紹介する場合、薬物療法が最善といった形の紹介を母親にすると、母親の側の見捨てられ不安を高めてしまうことになるので注意する。母親に医師を紹介するのは母親自身の治療ということで紹介するのではなくて、どこにも相談に行こうとしないわが子に対する母親の対処機能を側面から回復してもらうためである。(母親自身の心理的機能の障害がきわめて高い場合には、母親面接ではなくて、母親自身をクライアント本人とするカウンセリングを行うということになる。その場合には、面接の目的が母親面接のときよりも異なってくる。それは例えば、母親自身の心身症的問題の解決とか、抑うつ神経症の改善といったものである。)

子どもが担任との問題で悩んでいるような場合、無力-依存的タイプの母親は問題への対応をセラピストに肩代わりしてもらうことを欲することが多い。担任のパーソナリティ上の難点をしつこくセラピストに訴えたり、場合によればセラピストが直接担任とかけあってくれるようにとセラピストに頼んだりする。このような場合には細心の注意が必要となる。筆者自身は例えば、〈お子さんは担任からテストの成績のことをひどくけなされるので不登校気味になっているとのことですが、このような場合こそお母さんの出番ではないかと思えます。親として担任にどのようにアプローチしたらいいのか、少し工夫してみられませんか〉といった答え方をすることが多い。

## 2. 自責-誘惑的タイプ

2 番目の「自責-誘惑的タイプ」は、自分を責めることによってセラピストの同情を引き起こそうとする人である。1 番目と同様、何とかしてセラピストから対処法を引き出そうとする。このタイプも、抑うつ状態がひどいときがあるので注意する。

セラピストが母親の自責的パターンに巻き込まれてしまうと、面接のプロセスはいつまでたっても進展しない。〈お母さんは子どもさんに対するこれまでの養育態度を反省ばかりしておられますが、それが原因で子どもさんがこうなったのかどうか、本当のところはおそらく誰にも分かりません。どうしても養育態度というなら、これまでの養育態度のことよりも、現在の養育態度に焦点をあててみませんか。さしあたって、子どもさんがテレビゲームばかりやっているとき、お母さんはどのように子どもさんに働きかけておられますか〉といった形で介入するとよい。

ただしそうは言っても母親のなかには、過去の自分のやり方を悔やんでばかりいる人がいる。「私があの子を甘やかしてきたから、あの子は規則破りばかりするようになってしまった」「私はこれまであの子に厳しく接してきた。だから、あの子はこんなふうに自信のない無気力な人間になったしまった」などなど。このような場合セラピストとしては、母親の理由づけの真偽を取り上げるのではなくて、子どもに対する母親の過去のやり方を工夫という観点から吟味してみるとよい。具体的には、子どもを「甘やかす」とか「厳しく接する」といった母親の



工夫がなぜこれまでうまくいかなかったのかという線に沿って、これまでの母子関係を整理してみるとよいだろう。

### 3. 他責－攻撃的タイプ

3番目の「他責－攻撃的タイプ」は、母親以外の他者をひどく攻撃する。例えば夫のことを「子どもに対する理解がないし、いつも私ばかりを矢面に立たせる。卑怯で弱い男」とか、教師のことを「教員免許を持ったプロのくせに工夫が足りない」などと言って手厳しく攻撃し、そうすることで暗にセラピストに圧力を加える。このようなタイプの場合、セラピスト自身もいつか攻撃の対象となることを覚悟しておく必要がある。一般的には母親が子どもの問題の解決のことで何かをセラピストに頼み、それに対してセラピストが断ったときに母親の怒りが爆発しやすい。母親が言葉で直接セラピストを攻撃することもあるし、他の母親や学校関係者にセラピストの悪口を言い立てるといったこともある。

子どもが中学生の不登校の場合、母親がセラピストに対して中学校の教師（多くは担任）をひどく攻撃することがある。攻撃は、教師がやったことか、もしくは教師がやってくれなかったことについてである。このような場合、筆者は母親に対して、〈お母さんは、毎回必ず先生に対する不満を口にされますね。なかなか家庭訪問にやって来ないとか。来ても玄関先だけで、すぐに帰ってしまうとか。でも、よく考えてみて下さい。中学生で留年ということはまずありません。中学生は皆、3年間経ったら卒業です。たとえ1日しか登校しなくても、3年経ったら卒業します。子どもさんが卒業すれば、それで学校側は子どもさんとは縁が切れてしまいます。つまり、すべてはお母さんの両肩にかかってくることになります。お母さんが恐れておられたようにもしも子どもさんが中学を出たあともずっとひきこもるということになれば、その先何十年も子どもさんを背負っていかなければならなくなるかもしれません。そうならないように、今から準備しておく必要があるのではないのでしょうか。そのためには、学校の先生という社会資源をいかにうまく活用していけばいいのか、その工夫にエネルギーを向けられるほうが得策だと思いますが〉などと言うことが多い。

### 4. 不関－回避的タイプ

4番目の「不関－回避的タイプ」は、なんともよそよそしく、何か義務的に面接にやってきているような感じを受ける人である。わが子の問題に対する対処とか働きかけといったことにほとんど関心を示さず、淡々と家庭内外におけるわが子の「問題行動」をセラピストに報告する。そして、「よその家のなかを覗き見るなんて、いったいどういうことなのでしょう」などとセラピストに問いかけ、あとは沈黙してセラピストの返答を待ち受けている。子どもの行動について母親自身はどう感じたのかと質問しても、「さあ、どうなのでしょう」などはぐらかしてしまう。

特に子どもの問題行動が非行・犯罪の場合、子どもの問題行動それ自体が母親の親としての自尊心を極度に傷つける。それと同時に、問題行動に関連した事柄、例えば親が警察に呼ばれたり家庭裁判所の調査官の調査面接を受けたりすることも、親としての自尊心を極度に傷つける。このように、子どもによって母親の自尊心が極度に損傷させられている場合、母親は子どもに対する暖かい関心を抑圧してしまう。

不関－回避的タイプの母親は、セラピストとしてはやりにくい人である。もっとも、このような母親も母親面接に継続してやってきているかぎり、そこには母親なりの意欲（変化への意

欲)が潜在的にうかがえるので、セラピストとしては投げ出さないことが大切となる。

余談ながら筆者の印象では、生徒指導担当教諭や警察関係者から強く勧められた形で母親がセラピストの許にやってきているような場合、この不関一回避的タイプが多く見られる。セラピストとの面接にはやって来るものの、「しぶしぶと」「仕方なしに」といった印象がある。このような場合、例えば、〈お母さんとしては、お母さんが私のところにきちんとやってこないとお母さんの処分が重くなるかもしれないという不安をお持ちなんではないでしょうか〉〈これまでのお話から推測しますと、いつも親に恥ばかりかかせている子どもを切り捨てたいというお気持ちと、それでもわが子なんだからなんとか立ち直ってほしいというお気持ちとが心のなかでせめぎあっておられるようですね〉といった形で介入してみるとよい。

### 5. 中立－操作的タイプ

5番目の「中立－操作的タイプ」は、巧妙にセラピストを操作しようとする人である。セラピストをうまく持ち上げるので、セラピストとしてはいい気分となって、ついあれこれと対処法を語らされてしまうことになりやすい。

このタイプの場合、すべてにわたって「適度」という印象がある。子どもに対して適度の愛情と懸念を抱き、セラピストとも適度の距離を保つ。あまり自分の意見は言わず、物静かでつつましか、そつがなく自然な感じで、それとなく相手に取り入ることに長けている。社会的な適応力は高い。このような母親に対するセラピスト側の感情は概して良好である。そして、よく分からないまま母親のペースにはまってしまい、ずっと後になってやっとそのことに気づいたりする。他のタイプと比べると、最も社会的に洗練された対人操作法の持ち主と言えよう。

### 6. 率直－協力的タイプ

6番目の「率直－協力的タイプ」は、セラピストに対して率直かつ協力的な姿勢をとる人である。話し合っても裏表がなく、どこか清々しい感じで気持ちがよい。仮にセラピストを操作するとしても、操作の理由や背景が透明なので、セラピストとしては操られているという不快感はない。セラピストからの工夫の要請に対しては素直に取り組むことが多い。

以上、6つの母親のタイプを挙げた。言うまでもなく、これらは便宜的なタイプ分けであって、実際にはいくつかのタイプが入り交じっていることがあるし、一見どれか特定のタイプの母親だと思ってもそうでないこともある。例えば、うじうじといった感じで自分を責めつづける母親。しかし、よくよく家庭内における母親の対応様式を検討してみると、実は母親なりに工夫して子どもに対応していることがある。あるいは、子どもに何かあるとすぐに取り乱してセラピストに取りすがってくる母親。一見無力で依存的な母親なのであるが、しかしよく吟味してみると、このたびの子どもの悪化に対してすでに母親なりの手を打っていることがある。即断は禁物である。

母親面接の進展によってタイプが異なってくることもある。例えば、1番目の「無力－依存的タイプ」の母親の場合、母親からの取りすがりやもたれかかりをセラピストが適切にかわしながら辛抱強く母親の工夫の案出を促しているうちに、たまたま何気なく行った母親のやり方が効果的であった場合、無力－依存的な母親が次第に率直－協力的な母親に変化したりする。もちろん、その逆もありうる。特に慢性型の登校拒否や慢性型のひきこもりの場合には数年間

もの母親面接を継続することが必要となり、その長い経過中には、子どもにも母親にも他の家族成員にもさまざまなできごとが生じてくる。その結果、最初は率直—協力的な母親であったものが次第に無力—依存的となったり、他責—攻撃的となったりすることもある。

## XI 母親との関係性について

母親との関係においては、セラピストは、母親自身の内発的な工夫が生まれ出てくるような関係性を作りだすことが大切となろう。そのためには、以下の諸点に留意する。

### 1. 良質な関係性の形成

母親との関係性を良質なものとするためには、①母親自身の納得性を重視すること、②（他者からの問い合わせについては）母親の了解を求めること、③母親をだまさないこと（嘘をつかないこと）、④母親との約束を守ること（やむを得ない事情によって約束を破った場合には直ちに謝罪する）、⑤母親を含めた家族成員のプライバシーを確実に保護すること、といったことが大切となる。

特にプライバシーの保護に関しては、慎重すぎるほどの慎重さが必要となる。ちなみに、プライバシーの保護があまり問題とならない場合としては、①子どもないし母親に自殺の危険性がある場合、②子どもないし母親に犯罪行為がある場合である。これらの場合には、セラピストは関係者と連絡を取り合うことが必要となろう。

以上は母親面接における基本的な事柄であり、よき援助関係を形成するための前提条件ともいえるものである。

### 2. 関係性の深化

母親との関係性を深めるためには、質問と傾聴の繰り返しによって母親の心的状況を理解していくことが大切となる。セラピストとして留意すべき点として、次のようなものがある。①夫との協力関係はどのようなものか。②舅・姑と同居している場合、彼らと母親との関係はどのようなものか。彼らとの関係がよくない場合、夫はどの程度協力してくれているのか。③母子家庭の場合、母親の時間的・心理的な余裕はどの程度あるのか。④母親と学校関係者との協力関係はどのようなものか。⑤母親自身が現在直面している発達課題はどのようなものか。

セラピストは、これらの事柄を母親との話し合いのなかで徐々に整理・明確化していく必要がある。

### 3. 関係性の妨害要因について

面接にやってくる母親がセラピスト自身の内的母親像と重なることがある。より具体的に言えば、母親面接を継続していると、セラピスト自身の早期の、あるいは最近の母子関係が母親面接に妨害的な影響を及ぼすことがある。特にセラピストに対して攻撃的な母親の場合には、セラピスト自身の母親に対する過去の陰性感情が活性化されやすくなり、活性化された感情が目の前の母親に対する感情・気持ちをますます陰性のものにしていく。そして、場合によれば母親面接は中断してしまう。これは、伝統的な用語で言えば、古典的逆転移の問題である。

このような事態に陥った場合、セラピストとしてはいくつかの対応が必要となる。①セラピスト—母親関係について、誰かベテランのセラピストにスーパーヴィジョンをしてもらう。②

セラピスト自身が見る夢に注目して、夢のなかに直接的・隠喩的な形で現れる母親（母親面接を行っている母親）の実像をつかむ。③母親面接の目的をセラピストのなかで再度確認する。

これらのなかでは、最後の③が最も重要であろう。セラピストが逆転移に惑わされるのは、セラピスト自身が方向性喪失状態に陥っているときが少なくない。別の言い方をすれば、母親のなかに潜んでいる建設的自己への信頼が揺らぐとき、その間隙を縫って、セラピストの過去の未整理の母子関係が頭をもたげてくる。セラピストとしてはたえず、自分はいったいなんのためにこの母親と面接しているのかということを確認する必要がある。

逆転移の問題はしかし、セラピスト個人の倫理感覚とも関係する。一般的に言って、他責—攻撃的な母親は子どもに対してもかなり残酷なことをしていることが少なくない。ここでは、子どもに対する発達妨害的機能ないし発達破壊的機能のほうが勝っている。その上、後で他者に問いつめられた場合、例えば成績の上がないわが子の両腕や背中を竹製の物差しでどす黒く内出血するまで叩くという虐待を「教育的配慮に基づくしつけだった」などと言って合理化する。このような母親のあり方が、セラピストの倫理感覚を刺激し、セラピストは必要以上に母親を憎むようになる。

このように母親面接によってセラピスト内部の破壊的自己が活性化されやすくなるが、これは、セラピスト自身の過去の行為の記憶とも関係しよう。もちろん個々のセラピストによって程度や様態が異なるのであるが、例えば成人期初期のセラピストなら、過去の学校時代においてクラス内の弱者を精神的に搾取・攻撃した記憶が、中年期のセラピストならセラピスト自身の子どもや妻を精神的に搾取・攻撃した記憶が、初老期・老人期のセラピストならセラピスト自身の母親や父親を精神的に搾取・攻撃した記憶が蘇ってこよう。（このような記憶の蘇りはしかし、他責—攻撃的な母親を共感的に理解するための重要な通路ともなる。搾取や攻撃は、人間関係というものに常につきまとう権力構造的な側面だからである。）

要するに、子どもを破壊していく母親はいつしか母親を破壊していくセラピストとなり、そのことによって母親はますます破壊的となる。結果として、母親とセラピスト両者の精神の健康は破壊されていく。もしも事態がこのようになってしまった場合には、母親面接を他のセラピストに委ねたほうが賢明であろう。（母親面接を途中で他のセラピストに委ねようとする場合には、細心の注意が必要となる。何か適当な理由をつけて他のセラピストを紹介したとしても、母親自身は納得しないだろう。セラピストとしては、自分がもはやこの母親面接をやっていけない理由をきちんと母親に述べるのが大切となる。）

## XII 配偶者（夫）の問題

ほとんどの夫は母親面接にやってこない。母親面接の経過中に母親が夫に、セラピストのところと一緒にいこうと誘っても、夫は、仕事が忙しいなどの理由をつけて拒否してしまう。そのため、母親はよく、「夫の理解がない」とか「夫は何もしてくれない」などと不平を漏らす。夫の理解がないとか何もしてくれないというのは真実であることもあるし、そうでないこともある。しかし、ポイントはそこにはない。

ここで大切なのは母親の側の工夫である。このような場合セラピストとしては例えば、〈お子さんの問題についてご主人の理解がないということですね。それなら、どうすれば子どもさんの不登校状態についてご主人が少しでも理解してくれるようになるのか、その工夫を少し試みたらいかがでしょう〉などと母親に呼びかけてみる。要請するとそれなりに応じてくれる

ものである。実際のところ、子どもの不登校状態に対してまったく無関心という父親はいない。学校に行く代わりに家で漫画を読んだりテレビを見ていたりする子どもを叱ったり怒鳴ったりするのも、父親なりの関わり方なのである。ただ、その関わり方がそれまで何の効果も生まなかつたり逆効果をもたらしてしまったので父親が子どもから手を引いたというだけの話であって、父親は子どものことを内心大いに気にしているものである。そこに母親が介入する余地がある。

母親Hは、たまたま本屋で見つけた元登校拒否生徒の手記を夫の目につくところに置いておいた。その手記の内容は、Hの長女の現在の状態とよく似ているようにHには思えた。夫の勤務する会社は経営状態が悪化しており、夫の帰宅はいつも遅かった。夫はひどく疲れているようでもあった。H自身、夫の協力を得ることは半ば諦めていた。しかし、翌朝夫は会社に出かける前に、「あの本はなかなかよかったよ」とHに言った。Hはびっくりした。夫はHが眠ったあとで、ベッドの近くに置いてあった本を読んだということであった。それ以後、長女に対する夫の言動に変化が生じた。つまり、学校に行く・行かないではなくて、長女の心と体が元気であるかどうかということに夫の注意は向けられていき、それに応じて、夫に対する長女の態度も変わっていった。

### XIII おわりに

筆者は本稿においてはもっぱら、問題を持った子どもの母親のみを相手として行う継続的な単独母親面接についての留意点を記述した。しかし、本稿で述べた事柄は、並行母親面接（母子並行面接）や継時的母親面接（母子継時面接）の場合にも有効となろう。もっとも、並行母親面接の場合には子どもが別のセラピストに、継時的母親面接の場合には子どもが母親面接者と同じセラピストによって面接を受けているので、母親面接とは言っても、単独母親面接の場合とは母親に対する工夫の勧めの様態が異なってくる。それに、子ども本人がセラピストの許に継続的にやって来ることができるようであれば、それだけでセラピーは8割方成功だといってもよい。

工夫とは試行錯誤であり学習である。創意工夫という言葉を強調すれば、創造でもある。工夫はまた、相手に対する働きかけでもある。実際、相手に働きかけるからこそ見えてくるものが数多くある。

セラピストと母親との関係で言えば、工夫とは常に相互促進的なものである。セラピストにとっては母親の存在が、母親にとってはセラピストの存在がお互いの工夫を促進させていく。

一口に母親面接とは言っても、ほんの数回から数年・数十年にわたるものまでいろいろである。母親面接が長期間になる場合には、母親面接の経過中に母親は成功と挫折、前進と後退、希望と失望を繰り返すものである。しかし、その繰り返しのなかで母親の能動性は徐々に育っていく。そこに母親面接の妙味がうかがえよう。

### 引用文献

- 浅原尚子 2003 親の自己工夫を促す親面接のあり方 山口大学大学院教育学研究科修士論文抄, 1, 15-18.  
 名島潤慈 1983 単独母親面接における治療上の留意点 熊本大学教育学部紀要, 32, 人文科学, 185-197.

- 名島潤慈 2001. 工夫するということがよく分からないクライアントについて—能動的心理療法における工夫の問題 山口大学教育学部研究論叢, 51, 第3部, 25-31.
- 名島潤慈 2002 能動的心理療法における転換の問題 山口大学心理臨床研究, 2, 15-21.